



Title	<書評> de Laine, Marlene., "Fieldwork, Participation and Practice : Ethics and Dilemmas in Qualitative Research", Sage Publications, UK. 2000.
Author(s)	心光, 世津子
Citation	年報人間科学. 2002, 23-2, p. 411-415
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◇書評◇

de Laine, Marlene.

Fieldwork, Participation and Practice: Ethics and Dilemmas in Qualitative Research,

Sage Publications, UK. 2000.

心光世津子

1

研究上の倫理的トラブルは誰しも避けたいことである。研究上生じうる問題を把握し倫理的配慮をすることは、研究対象者の人権を守るだけでなく、研究者自身の立場を守ることにもなる。しかし、前例に学ぶことは難しい。岩本(一九九七)が指摘するように、「何らかの問題を耳にした研究者は少なくないと思われるが、現在の日本では公的に語られたり公的に記録される」とはまづない」のであるから(岩本1997:70)。

秘密の保守やインフォームド・コンセントなど、研究の基本ルールとも言える倫理綱領は、研究の準備段階から目を通しておく必要があるだろう¹。しかし、質的研究、とくに対象者との相互行為を伴うフィールドワークの各局面で出会うジレンマに、倫理綱領が具体的な解決策を示してくれるわけではない。「フィールドワークをめぐる倫理上の問題は、日常生活を作り上げている複雑な状況に対する慎重な配慮が要求されるものであり、文脈抜きで外側だけから判断しただけでは分かりにくい事柄があまりにも多い」(佐藤1992:223)のである。

そのためか、フィールドワークの倫理的問題を主題とする本は、和書ではほとんどない。洋書でも、論集というかたちで出版された本はいくつかあるが、一人の著者により体系的に議論されたものは非常に少ない。本書は、その数少ない試みの一つと言えよう。著者のde Laineは、オーストラリアにあるFlinders大学で看護お

よび公衆衛生の教鞭をとっていたが、現在は独立して質的研究のコンサルタント(qualitative research consultant)としている。彼女は本書で、社会学、人類学、心理学など様々な分野の質的研究に関連する文献から、倫理的ジレンマに関する議論をレビューしている。著者は言つ。「倫理的、道徳的ジレンマは、避けられない」とあり、すなわちフィールドワークをしていく際の職業上の危険(occupational hazard)である。ジレンマや両面感情は必ずしも事前に分かるわけがないし、実際には事前に対策を立ておく」とはで、ある。(1-11)。「倫理的ジレンマは、[正し]決定と[うの]がなく、「ただ思慮深くトされ、おそひく他の選択肢よりも[適切な]決定」(Hill, Glaser and Harden, 1995:19)があるのみ、といふ状況である。(11)。著者は、「」のよひにフィールドワークをめぐる倫理的問題の複雑さを強調し、各章で倫理的、道徳的問題やジレンマがどのように発生し、どのように解決あるいは回避できるかを描いている。本書のねじは、フィールドでの活動が有害となる可能性を研究者がより理解する必要があると示すことである。あるいは、やうすいことや、研究上のジレンマを扱う方法を読者が打ち出せるよう促してく」とある。

「あるシノハマ」について、様々な研究例を紹介しながら議論していく。第一章「質的フィールドワーカーの精神的闘歴(The moral career of the qualitative fieldworker)」の章で用いられた「精神的闘歴」は、E.Goffmanの「アサイハム」に由来する。この概念は、T.A.Schwandtの議論に沿って、フィールドワーカーの精神的な局面を明るかにする枠組となってくる。

の枠組を受けて、次にN.K.Denzinによる「の倫理モデル」が提示される。一つは伝統的倫理モデル(traditional ethical model)、もう一つはフェミニスト・コモンズ・タリアン・モデル(feminist communitarian model)である。前者はわが国で、倫理的絶対主義(ethical absolutism)と倫理的相対主義(ethical relativism)にわかれている。倫理的絶対主義では、研究者はその協力者に必ず研究に先だって目的や役割の説明をし、同意を得なければならない。また、倫理的相対主義では、説明や同意についてでは、研究者の良心にまかせられている。一方、フェミニスト・コモンズ・タリアン・モデルの立場の研究者は、セラピストやケア提供者などとして、対象者に支持的に関わることで伝統的モデルとは根本的に異なる。説明や同意よりもむしろ、ケアを基礎とした倫理である。このモデルでは、必ず個人的に関わることと、政治的にコモンズしてくること、実証主義のよつたな道徳的に忠実な観察者でない」とが想定される。

本書は、全九章の構成である。一章の序論と九章の結論以外は、フィールドに入る段階から記述に至るまでの、研究の各局面で生じ

やも異なつてくるだらう。

三章「台本(Scritps and staging the self)」。台本は、外見(appearances)と演技(performance)を演出する」とを表わすメタファーとして用いられてゐる。これは、アクセスする前にあらかじめ用意されるものである。フィールドにアクセスする時に、研究者の振る舞いや、対象者とその状況に応じて研究者の立場が決まり、それによってその後の研究者と対象者との関係が決まつてしまつ。皮肉なのは、何がその場で「適切」なのか、事前にはよく分からぬい」とである。この章では、そつとつたフィールドにアクセスする際の問題や対象者との距離に関する問題が示されている。台本を用意していく中で生じうる問題として、情報を得るよりも先に関係が深まる」とで起つる「親密さのパラドクス」、さらに、裏切りの危険やアクセスの障壁などが論じられる。

四章「裏の領域と繊細な方法(Back regions and sensitive method)」。この章でとりあげられるのは、裏の領域、例えば廊下や化粧室での会話などで得たデータを用いる」とによる問題である。そこでは、リラックスした状況でインフォーマルな情報が得られる。どんなにインフォームド・コンセントがされていよつとも、それを研究上のデータとすれば、その用い方によつて対象者は裏切られたと感じるだらう。これはインフォームド・コンセントがされていても、研究者が倫理的であるところとの保証にはならない例である。

五章「役割と演技(Roles and performance)」。この章では、研究者の役割の様々な分類 (①完全なる参加者／完全なる観察者／観察

者としての参加者／参加者としての観察者、②周辺的メンバー／積極的メンバー／完全なメンバー、③部内者／部外者)を紹介し、その研究に与える影響などについて考察してゐる。この議論に関連して、オーバーラボールのデータ収集過程への有害性について触れてゐる。さらに、この章では、研究者でもある友人でもある場合や、研究者だからセラピストだから友人である場合など、対象者に対し複数の役割をとることでの葛藤についても触れてゐる。

六章「倫理的ジレンマ：様々な聴衆の要求と期待(Ethical dilemmas: the demands and expectations of various audiences)」。ここに、聴衆とは、研究の目的によってフィールドへのアクセスを禁止する力をもつた組織内の人物や研究を進めていく上での案内役、アカデミックな領域の共同研究者、編者、スーパーバイザーなどである。これらの聴衆からの要求と期待、また聴衆に対して負う責任からジレンマが生じる。これに対する倫理コードやガイドラインにしたがつて決定していかねばならない。しかしその一方で、研究者は、研究の中での聴衆の要求や期待とも共存できるよう努める必要がある。

七章「フィールドノーツ：倫理と感情的面(Notes: ethics and the emotional self)」。フィールドワークをしていく上で、研究者は葛藤や困惑、怒りなど様々な感情を経験する。現代の研究者は、自身がフィールドで経験したことだけでなく、解釈の方法として感情の経験にも注意を向けている。人間関係における感情のダイナミクスの記述と分析がなければ、発見したものの解釈や経験の理

解に必要な、枠組や文脈の重要な部分が失われてしまつ、と著者は嘆かへ。この章では、感情を分析の対象とした研究として、A.Hoschildの感情労働(emotion work)、H.Garfinkelの降格儀礼(degradation ceremony)、N.K.Denzinのエピファニー(epiphanies)をとりあげてゐる。

八章「テクスト上での曲口」および他者の「印象操作」(Textual 'impression management' of self and others)。この章では、「テクストの管理(textual management)」のほか、最終産物を書く際の文章作法が整理されてゐる。本文中で研究者自身の表わし方、対象者の話や対象者自身の表わし方によつて生じる問題がこの章の主な焦点である。また、暴露や出版に関する問題にも触れてゐる。このいふた問題は、対象者や共同研究者がきちんと知らされていない、あるいはかつて知らされていた方法と発表されたものが違つてゐるような場合に起つただらう。研究計画書の段階から注意が必要である。

ただ、三章以降では、場面場面での実際的な問題が扱われるに留まり、一章で紹介された倫理モデルの違いによりどのような問題が想定されるか、関連付けて述べられておらず、はつきりしない。これは、それぞれのモデルにおいて何が倫理的なか、何が道徳的なのか、という問い合わせがながるだらう。このような、より根本的な問い合わせの道筋も、著者は示しておく必要があつたのではないか。また、このことはフィールドワークに関わる研究者も取り組んでいかねばならない問題である。

著者de Laineが本書の冒頭で述べてゐるように、フィールドワークにはこれが正しいといふ方法はなく、倫理的な問題は避けることができない。質的研究はフレキシブルに戦略を用いられるところにその利点があるが、その相互行為の中でトラブルがおこらないよう状況に応じてフレキシブルに対応せねばならない。倫理綱領に従ふ、全くその通りに行動しようとする、研究者はフィールドで身動き

【注】

- (1) 日本では、まだ倫理綱領が十分に整備されてゐるとは言ふ難い。今とのところ、倫理的問題についての議論のほとんどは、主に海外、ふくにアメリカで制定された綱領をもとになされてゐる。

若本健良、一九九七「社会制度としての研究倫理——アメリカ社会学会の実

例と日本の社会学者の議論」、「理論と方法」、一一巻一号、六九・八四

Hill, M., Glaser, K. and Harden, J. (1995). A feminist model for ethical decision making. In E.J. Rave and C.C. Larsen (eds), *Ethical decision making in therapy: feminist perspectives*. New York: Guilford Press.

pp.18-37.

南博文、一九九七、「現場研究と研究者倫理をめぐる: フィールドワークの一
例のシナリオ」、「発達心理学研究」、八巻一号、六九・七一

佐藤郁哉、一九九一、「ハイールドワーク一書を持って街に出るべ」、初版、

新曜社